

Letter for Members

【コンテンツ】

- 日本補綴歯科学会 設立 90周年記念事業…………… 1
記念事業報告
- 第 132 回学術大会…………… 4
— 第 132 回学術大会開催
— 令和 5 年度専門医研修会報告
— シンポジウム開催報告
記念講演会・記念祝賀会
学会マスコットキャラクター
- 令和 5 年度定時総会…………… 11
- 渉外委員会報告…………… 12
- 市民フォーラム…………… 13
- JPS student clinical skills competition…………… 14
- 受賞者の声…………… 15
令和 4 年度学会優秀論文賞
学会論文賞
奨励論文賞
JPR Best Paper Award Review Article 部門
JPR Best Paper Award Original Article 部門
第 132 回学術大会優秀賞
課題口演賞
課題口演優秀賞
優秀ポスター賞
- 歯科補綴学専門用語集 第 6 版…………… 26
- Prosthodontic Meeting for
Next Generation 2023 開催報告…………… 27
- 補綴関連講座・分野新教授紹介…………… 28

日本補綴歯科学会 設立90周年記念事業

① 第 132 回学術大会 — 設立 90 周年記念大会 —

テ ー マ 補綴の未来, 歯科の未来
“Society 5.0 に向けたイノベーション
の創出”

会 期 2023 年 5 月 19 日 (金) ~ 21 日 (日)

開 催 形 式 ハイブリッド開催
(現地開催 + WEB 配信)

会 場 パシフィコ横浜

大 会 長 馬場 一美 (昭和大)

実行委員長 岩佐 文則 (昭和大)

準備委員長 田中 晋平 (昭和大)

学術委員長 大久保力廣 (鶴見大)

② 設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念 講演会

会 期 2023 年 6 月 11 日 (日)

会 場 帝国ホテル東京

座 長 日本補綴歯科学会 前理事長
(第 39 代理事長) 馬場 一美

【特別講演 1】

演題 「国民皆歯科健診への道筋」

演者 参議院議員 参議院厚生労働委員長
山田 宏 先生

【特別講演 2】

演題 「歯科医師会および歯科医師が日本補綴歯
科学会に期待すること」

演者 日本歯科医師連盟会長 高橋 英登 先生

【記念講演】

演題 「補綴歯科専門医の誕生とその使命」

演者 日本補綴歯科学会 第 31 代理事長
赤川 安正 先生

③ 設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念 祝賀会

会 期 2023 年 6 月 11 日 (日)

会 場 帝国ホテル東京

【記念講演 日本補綴歯科学会の近年の歩み】

演題 「公益社団法人日本補綴歯科学会設立 90 周
年記念に寄せて ~ 1997 年から 2008 年
までの活動を振り返って~」

演者 日本補綴歯科学会 第 32 代理事長
平井 敏博 先生

④ 設立 90 周年記念誌

本会設立 90 周年を記念し、設立 100 周年へ向け
て本会の現状を記録することを目的に、近年 20 年
に焦点を絞って主な事業をまとめ、編纂いたしました。

⑤ 設立 90 周年記念 マスコットキャラクター制定

社会連携委員会は、設立 90 周年記念事業の一つ
として、本会のマスコットキャラクターの作成を企
画いたしました。本キャラクターはペアとなってお
り、補綴歯科治療の技術の象徴である「補綴 (ほて
つ) くん」と、豊かな知識を象徴する女神である
「プロソちゃん」といたしました。

今回、広く国民の皆様からの公募でマスコットキャラクターデザインを募集することにより、もっと「補綴歯科」の仕事を多くの皆様に知っていただき、理解していただくことを目的としました。

公募の結果、なんと日本全国のみならず海外からの応募も含め、400 を超える応募がございました。



みんなから愛される学会マスコットキャラクターを作りました！

どれも素晴らしい作品ばかりでしたが、この中から厳正な審査の結果、5 作品（最優秀賞 1 作品、優秀賞 4 作品）が選出され、2023 年 4 月 12 日の「補綴（ほてつ）の日」にプレスリリースするとともに、本会ホームページに掲載されました。

⑥ 記念ロゴマークの作成

本会が設立 90 周年を迎えることが一目でわかり、下部にリボンを配してシンプルにまとめました。中心にクラウンで環を描くことで、本会のイメージを表現しつつ、本会の結束を示しました。



設立90周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念講演会・祝賀会報告

2023 年 6 月 11 日、帝国ホテル東京において「公益社団法人日本補綴歯科学会 設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念講演会・祝賀会」が開催されました。これは 1933 年に設立された日本補綴歯科学会の設立 90 周年をお祝いする「設立 90 周年記念講演会・祝賀会」に、5 月 24 日に「補綴歯科専門医制度」が日本歯科専門医機構より正式に認定されたお祝いの行事を追加したものです。この「設立 90 周年記念講演会・祝賀会」を開催しようという馬場前理事長の英断もさることながら、広告可能な補綴歯科専門医制度の認定という本学会の長年の悲願が達成されたタイミングがこの瞬間に一致したことは奇跡的であったと言わざるを得ません。なぜなら、通常この様な大規模な周年行事を行うためには随分前から予算の積み立てを行わなくてはなりません。しかし、馬場前理事長がこの両者を併せてタイミング良く祝賀会ができるのではと思いつかれたのは、少なくとも馬場執行部の後半であり、十分な予算立ての準備があったはずありません。ところが、この数年、コロナ禍により委員会活動が対面でなされなかったため、予算的に余裕がありました。また、大都市で学術大会を行うためには参加費

の増額に踏み切る必要があり、馬場前理事長の一声でこれも決まりました。これらにより、財務的に余裕ができたことがまずはその下地であったと言えます。ところが、機構認定補綴歯科専門医制度のほうはそう簡単にはいきません。日本歯科専門医機構の制度審査に 2022 年の秋には通っていたにも関わらず、運用審査に思いもかけず難航し、年末から年始にかけて書類の全面的な修正や認定研修施設の現地調査を経て臨んだ 2023 年 3 月末の運用審査においても不十分との判断がなされるなど直前までこの祝賀会が可能であるとは思えなかったのです。最終的には、日本歯科専門医機構の今井理事長のご尽力と馬場前理事長の奇跡を呼び込む力で滑り込むことができましたが、その間、日曜日であろうと休日であろうと関係なく、夜 9 時からの会議が当たり前でありました。この場を借りて、馬場前理事長、小見山総務理事、河相前修練医・認定医・専門医制度委員会委員長、木本前修練医・認定医・専門医認定委員会委員長、武部規定検討委員会委員長、鮎川前教育問題検討委員会委員長、高場前理事長幹事、飯田総務幹事、石川事務局長ら関係各位に厚く御礼を申し上げます。このようにギリギリまでこの会の

補綴歯科専門医制度認定のお祝いの部分は伏せられていたため、実際にこの祝賀会の準備をされた上田広報委員会委員長の爆発的な活躍なくしてこの会が開催できたとは思えません。準備されていたとは言え、5月末からの数週間で、看板から記念誌に至るまですべての内容が置き換えられたのです。お陰で、当日は200名を超える参加者が一同に会し無事帝国ホテル東京で盛大な祝賀会が開催できました。ただ、最初からこれが機構認定補綴歯科専門医制度のお祝いであると広く華々しく広報することができていれば、もっとたくさんの会員や協賛企業の方々をご参集になられたかもしれないと少しだけ残念に思っておりますが、このような事情があったことからご容赦いただけましたら幸いです。

記念講演会では、馬場前理事長の座長により、参議院厚生労働委員長であられる山田 宏先生より「国民皆歯科健診への道筋」と題して、歯科からのエビデンスが歯科医療だけでなく、医療、介護、福祉を変えることにつながるという非常に広い見地からの力強いご講演を賜りました。次に、そのほんの少し後に日本歯科医師会会長になられた高橋英登先生より「歯科医師会および歯科医師が日本補綴歯科学会に期待すること」と題して、先生自らが日本補綴歯科学会の会員であることから、補綴（ほてつ）という言葉や概念をもっともっと国民に広く周知してほしい。そのために、今回の広告可能な補綴歯科専門医制度を利用してほしいと非常に力強く、また有り難いお話をいただきました。

最後に、日本補綴歯科学会第31代理事長である赤川安正教授より「補綴歯科専門医の誕生とその使命」について補綴治療に難易度分類を導入した経緯、専門医制度にいたる道標についてご講演をいただきました。講演の最後に、機構認定補綴歯科専門医制度の質保証を、今後会員自らが問いかけることが重要であり、Professional Integrityこそがその答えであるとのご教授を賜りました。この患者中心の考え方や自分自身を律する誠実な対応を推したそのお言葉は強く我々の心に響きました。その後、祝賀会が開催され、日本補綴歯科学会第32代理事長である平井敏博教授より1997年から2008年までの学会活動を振り返る懐かしいお話をいただきました。平井教授が公演中に感極まれて言葉に詰まられた瞬間には、会場に居合わせた会員皆が感動し、この輝かしい日本補綴歯科学会の90年の歴史は多くの先達の無償のご尽力が連なった結果なのだと改めて強く感謝させていただいた次第です。

最後になりましたが、本講演会・祝賀会が盛会裏に完遂できましたことをご報告できるこの光栄に感謝を申し上げます。このような慶事は、設立100周年記念式典が開催されるまでないかもしれませんが、その時に設立90周年記念祝賀会の経緯を少しでも残しておく必要もあろうかと筆を執らせていただきました。ご参加いただいた諸先生方、開催にあたりご尽力いただきました設立90周年記念事業準備委員会および関係各位に厚く御礼申し上げます。

(理事長 窪木拓男)



第132回学術大会

2023年5月19日(金)から21日(日)の3日間に渡り公益社団法人日本補綴歯科学会第132回学術大会—設立90周年記念大会—を横浜のパシフィコ横浜にてハイブリッドで開催致しました。まずは、本学術大会開催に際しまして、多くの企業様ならびに法人様よりご協賛いただきましたこと心より御礼申し上げます。お陰様で無事盛会のうちに終了することができました。また、当大会の運営や設営にご尽力いただきましたキョードープラスの方々、会場となったパシフィコ横浜の皆様、大会校を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、今回の学術大会ですが、本会に先立ち、金曜日の夕刻より271名の会員を集めて意見交換会を開催させていただきました。前理事長、本年度大会長の馬場からの挨拶に続き、昭和大学理事長の小口勝司先生、一般社団法人日本歯科専門医機構理事長の今井裕先生を始め多くのご来賓の方より設立90周年のご祝辞を頂戴致しました。さらに日本臨床歯科学会の山崎長郎理事長から乾杯のご発声を頂戴し、有意義な意見交換の場として貴重なお時間をとお過ごしいただけたかと存じます。また、本会の日曜日に開催された特別講演では昭和大学の二木芳人教授より「新型コロナウイルス感染症パンデミックの終息に向けて」と題して

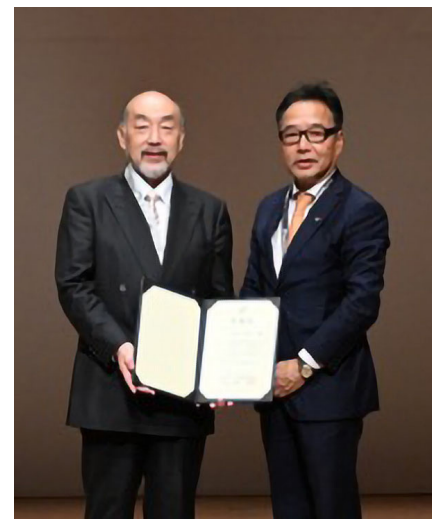
非常にタイムリーなご講演を頂戴し、さまざまな視点からこれまでの経緯、現状、今後の予測まで具体的かつ分かりやすく解説いただきました。限られた時間内で大量かつ重要な情報を整然と分かりやすくご提供いただけたことに私自身深く感銘を受けました。本当に多くの先生方に本学術大会に多大な貢献をいただきましたこと、感謝の意に堪えません。

今回の学術大会ではWEBを含む参加登録数2,807名のご参加を確認させていただきました。学術委員会の先生方を中心にご準備いただいた数多くのセッションから、最新の学術情報や臨床知見について活発なご討議をいただきましたこと、また共催いただきました日本臨床歯科学会の先生方にも随所で学会を支えていただき、有益な意見交換が沢山できましたことに敬意と謝意を表したく存じます。

閉会式で次期大会長の日本大学松戸歯学部の河相安彦先生よりご案内がありましたとおり、来年の「第133回大会」は千葉の幕張で開催を予定しております。まだ少し早いかもしれませんが、設立100周年という大きな節目に向け、補綴学会のさらなる発展を祈念し、簡単ではございますが学術大会のご報告とさせていただきます。皆様、ご参加・ご出席いただき誠にありがとうございました。(実行委員長 岩佐文則)



第132回学術大会集合写真



二木先生、馬場先生

●令和5年度専門医研修会報告

2023年5月21日(日)、修練医・認定医・専門医制度委員会の河相委員長(日大松戸)と槇原絵理先生(九歯大)座長のもと令和5年度専門医研修会が開催されました。一般社団法人日本歯科専門医機構の認証にあたり、補綴歯科専門医は国民にとって有益な専門医として、一般歯科では対応が困難な病態への取り組みが今以上に重要な課題となります。本研修会は、昨年度に引き続き「補綴難症例に対する補綴歯科専門医の解決策を共有する(その2)」をテーマとし「補綴難症例」の中から「睡眠時無呼吸症(Obstructive sleep apnea, 以下OSA)」の対応について新進気鋭の3名の先生にご登壇いただき、あらゆる角度から睡眠時無呼吸症の治療について解説いただきました。

研修に先立ち、座長の方から日本歯科専門医機構認証の補綴歯科専門医の概略と、今回の研修会は補綴専門医として対応することが求められる8病態の中から「睡眠時無呼吸症」に焦点を絞ることを述べ、講師の紹介を行われました。

まず、重田優子先生(鶴見大)に「睡眠時無呼吸症患者の画像的特徴」と題してご講演をいただきました。重田先生には気道閉鎖の要因に関する画像研究をご紹介いただき、OSA発現のメカニズムの一端について解説をいただきました。睡眠時無呼吸症の臨床に役立つばかりでなく、今後のメカニズム解明に関わるリサーチクエストを示唆する内容でありました。

続いて石山裕之先生(医歯大)から「睡眠時無呼吸の口腔内装置療法—治療効果および副作用について—」と題してご講演をいただきました。石山先生

には持続陽圧呼吸療法(CPAP)を対照に口腔内装置(OA)の治療効果および副作用について触れていただいた上で、OAの下顎位を調整するタイトレーションの行い方や、副作用に関する注意点と解決策などについて解説をいただきました。最後に、OSA治療に補綴歯科専門医が積極的に関与することが望まれることを強調いただきました。

最後に渡辺崇文先生(九歯大)から「睡眠時無呼吸症患者をとりまく多職種連携について」と題してご講演をいただきました。渡辺先生にはOSAに対して医科歯科連携で対応する歯科保険制度が構築されて以来携わってきた診療の実際について、情報提供書などを通じた連携のあり方やOA製作に関わる模型診断と技工作業や技工士への指示などについて全体の連携のあり方をフローチャートで提示していただき、ステップごとに順を追って解説いただきました。そのうえで、密な連携の重要性を強調いただきました。

最後に座長の槇原先生より日本補綴歯科学会専門医としてのOSA患者の治療の携わり方について①医療機関から送付された診断内容の把握、②OAの製作に加えて治療効果と副作用の把握と連携と継続的なフォローが重要である点を示して会を閉じました。3名の先生が日々補綴歯科専門医としてOSAに向き合う考え方や姿勢と叡智がいかに伝わった研修会であったと確信しました。第132回学術大会学会のファイナルプログラムである本研修会には、対面とオンライン合わせて1,000名を超える参加者に聴講いただきましたことに深く感謝を申し上げます。

(修練医・認定医・専門医制度委員長 河相安彦)

日本補綴歯科学会専門医としての 睡眠時無呼吸症患者の治療の携わり方

- 睡眠時無呼吸症の症状や病態、特徴を理解し、医療機関から送付された診断内容を把握する
- 口腔内装置を提供するだけでなく、治療効果と副作用のバランスを考慮しながら治療顎位の検討を行い、医療機関との連携を行う
- 口腔内装置による治療で生じる副作用について理解し、継続的にフォローを行い、適切にすみやかに対応する



●シンポジウム開催報告

●メインシンポジウム

「臨床へ実装されるバイオロジー研究 ～研究室から診療室へ～」

座長：疋田一洋（北医療大）

江草 宏（東北大）

シンポジスト：二川浩樹（広島大）

窪木拓男（岡山大）

澤瀬 隆（長崎大）

吉田靖弘（北海道大）



本シンポジウムでは、バイオロジー研究で優れた業績のある4名の先生方に、研究をどのように実用化へ結びつけたのかについて、それぞれの経験を元にご講演いただきました。研究の発想や進め方、研究費獲得のノウハウ、実用化への留意点など、具体的な例をお示しいただき、会員、特に若手研究者に向け、夢と希望を届けるとともに、これからの研究活動へのモチベーションとなるシンポジウムになりました。

(疋田一洋, 江草 宏)

●シンポジウム1

(日本顎咬合学会共催)

「補綴の原点である咬合を極める」

座長：山下秀一郎（東歯大）

谷田部 優（東京支部）

シンポジスト：重本修伺（鶴見大）

上田秀朗（九州支部）

中村健太郎（東海支部）

補綴処置により咬合再構成を行う際に、手順を誤ると望まれる咬合状態がなかなか決まらずに治療期間の延長へとつながることになります。咬合を理解するためには明確な「ものさし」が必要です。これがなければ定量的な評価はできず、いつまでたっても試行錯誤の治療が続くだけです。本シンポジウムでは、3名のシンポジストの先生から、ご自身の用いる「ものさ

し」をご紹介していただき、咬合の見える化に関して多角的な視点からディスカッションを繰り広げることができました。今後の診療・研究につながる素晴らしいシンポジウムとなりました。

(山下秀一郎, 谷田部 優)



●シンポジウム2

一般社団法人日本歯科理工学会／一般社団法人日本接着歯学会共催

「どちらを使う？二ケイ酸リチウムガラスとジルコニアの徹底比較」

座長：小峰 太（日本大）

南 弘之（鹿児島大）

シンポジスト：伴 清治（愛院大）

猪越正直（医歯大）

大谷恭史（関西支部）

本シンポジウムでは、患者の審美的要求の高まりに応えるオールセラミックの補綴装置の代表的な材料である二ケイ酸リチウムガラスセラミックスとジルコニアについて、それぞれの物性、接着技法、および臨床術式について解説していただきました。同時間帯に専門医研修単位認定対象セッションも開催されていたため聴衆の分散が危惧されましたが、日本歯科理工学会および日本接着歯学会との共催であったこともあり、会場は満席で、立ち見の方が出るほどの大盛況となりました。その選択は多くの臨床家が迷うところであり、結論を導きにくいテーマでしたが、個々の症例において両者を使い分けるための多くの情報がもたらされたと考えています。

(小峰 太, 南 弘之)



●シンポジウム3

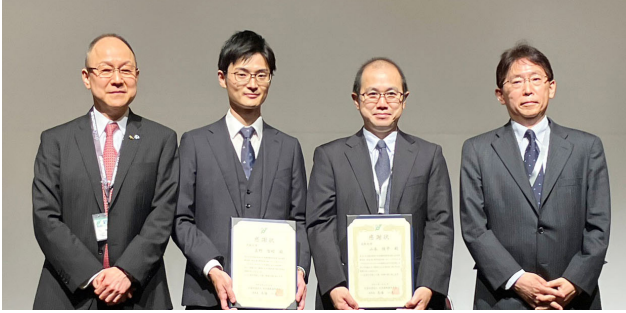
「リアルワールドデータの歯科における利活用」

座長：池邊一典（大阪大）

 笛木賢治（医歯大）

シンポジスト：山本陵平（大阪大）

 豆野智昭（大阪大）



注目度が飛躍的に高まっているデータサイエンスですが、本学会としてはまだまだニッチな分野です。本企画はリアルワールドデータの活用についてのキックオフイベントとして、歯科分野での実践例を持つ2名の先生にご登壇いただきました。この手の講演は、ややこしい内容に偏りがちですが、RCTとの相違など世界での実践例の解説とともに、補綴歯科領域まで落とし込んだ結果を示すことで、馴染みやすい内容になるよう努めました。参加した先生方からは「興味深かった、勉強になった」との好評価をいただき、有意義なセッションとなりました。

（池邊一典， 笛木賢治）

●シンポジウム4

「シングルセル解析とバイオインフォマティクスで拓く補綴歯科研究～単一細胞から組織発生・再生のメカニズムを理解する～」

座長：秋葉陽介（新潟大）

 大島正充（徳島大）

シンポジスト：大野充昭（岡山大）

 大庭伸介（大阪大）



近年、一細胞単位での遺伝子発現解析により、これまでとは違うレベルで生命現象を理解できるようになっています。補綴領域のバイオロジー研究も、これらの技術やコンセプトの理解が必要であり、本シンポジウムを企画しました。大野先生にはシングルセル解析の基礎的なお話と、ご自身の研究について、大庭先生にはシングルセル解析、空間トランスクリプトーム解析などについてご講演いただきました。最先端の解析技術とお二人の緻密な研究戦略に感銘を受けました。聴講した先生方のご研究が、未来の補綴臨床を発展させることを信じて報告を終えさせていただきます。

（秋葉陽介， 大島正充）

●シンポジウム5

「歯科金属アレルギー診療 指針に向かう道標」

座長：江草 宏（東北大）

 峯 篤志（大阪大）

シンポジスト：矢上晶子（藤田医科大）

 加治屋幹人（広島大）

 正木千尋（九歯大）

 秋葉陽介（新潟大）



厚生労働科学研究費の事業として『金属アレルギーの新規管理法の確立に関する研究』が立ち上がり、歯科は医科と連携して実態調査、診断法確立、そして多科連携診療モデルの構築に取り組んでいます。本シンポジウムでは歯科金属アレルギー治療指針策定を目標として、本疾患に関連の深い日本歯科保存学会、日本口腔インプラント学会とともに現状を確認するために各方面からの最新知見をご講演いただきました。準備段階では、治療指針策定と多科連携の重要性を会員に伝えるために、演者と座長で熱い議論が繰り広げられました。当日、その熱を皆様にしっかり表現することができたと感じています。 （峯 篤史， 江草 宏）

●設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念講演会

2023 年 6 月 11 日 (日) に、帝国ホテル東京孔雀東の間にて、設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念講演会を開催いたしました。早朝より雨が降る中、250 名の参加がありました。

記念講演会では、上田貴之準備委員長の司会進行のもと、小見山 道常務理事が開会の辞を、窪木拓男第 40 代理事長が主催者挨拶を述べられました。

特別講演 1 では、座長を前理事長 馬場一美先生にお努めいただき、参議院議員 参議院厚生労働委員長 山田宏先生に「国民皆歯科健診への道筋」についてご講演いただきました。

山田先生は、団塊の世代の方々が後期高齢者となり、今後も医療費の急増が予想されるなかで、国民の健康増進と疾病予防に力を入れ、国民皆保険制度を維持してゆく切り札は口腔の健康であると述べられました。また、国は口腔の健康が全身の健康につながることを認め、皆保険制度を維持するために「国民皆歯科健診」の実現に動き始めていることをご教示いただきました。

特別講演 2 では、日本歯科医師連盟会長 高橋英登先生に「歯科医師会および歯科医師が日本補綴歯科学会に期待すること」についてご講演いただきました。

高橋先生は、補綴学は人間が人間らしく生きるのに

必要な、核心的な学問であるとし、人間らしさには機能のみでなく審美性も含まれるため、金銀パラジウム合金という保険のための国策合金から脱却し、先進国にふさわしい審美レベルになってほしいと言及されました。最後に、「それらを国民に提供するのは一般の歯科医師です。一般の歯科医師が、患者さんにとって安全で効果的な治療を提供できるよう、正しい知識と多くの選択肢を与えていただければ幸いに思います」と結ばれました。

記念講演では、第 31 代理事長 赤川安正先生に「補綴歯科専門医の誕生とその使命」についてご講演いただきました。

赤川先生は、日本歯科専門医機構が定義する歯科専門医とは「それぞれの専門領域において適切な研修教育を受け、十分な知識と経験を備え、患者から信頼される専門医療を提供できる歯科医師」と紹介され、本学会が 2005 年から補綴歯科専門医に関する委員会を立ち上げて検討を開始し、国民に資する補綴歯科専門医の確立を目指してきた道程をお話しされました。結びに、国民の負託に応える補綴歯科専門医の使命を Professional Integrity と表現されました。

最後に、前副理事長 細川隆司先生が閉会の辞を述べられ、講演会は終了しました。

(広報委員 岡崎洋平)



受付



座長 前理事長 馬場一美先生



特別講演 1
参議院議員 参議院厚生労働委員長 山田宏先生



講演会開始前の賑わい



特別講演 2
日本歯科医師連盟会長 高橋英登先生



記念講演
第 31 代理事長 赤川安正先生



講演時の会場全景

● 設立 90 周年記念・補綴歯科専門医制度認定記念祝賀会

2023年6月11日午後より、帝国ホテル東京孔雀東の間において、日本補綴歯科学会設立90周年記念・補綴歯科専門医制度認定を祝う記念祝賀会が、ご来賓はじめ247名の参加のもと、盛大に挙行されました。まず開会に先立ち、二川浩樹副理事長より開会の辞が述べられました。その後、窪木拓男理事長による主催者挨拶がなされ、これまで90年の長きにわたり会員の先生方が築いてこられた本学会の輝かしい歩みに感謝されました。また、新たに認定をうけた広告可能な専門医制度を含め、益々の発展に尽力していくことを誓われるとともに、参加された先生方にとって、これまでの歴史と新たな未来を語る祝賀会となるよう祈念されました。続いて、ご臨席のご来賓を代表して、日本歯科医師会 柳川忠廣副会長、日本歯科医学会 住友雅人会長、日本歯科専門医機構 今井 裕理事長より祝辞が述べられました。それぞれの先生からは、日本補綴歯科学会が歯科界を牽引されてきたことに対する敬意と感謝を述べられるとともに、新たに認定された補綴歯科専門医制度をきっかけに、これまで以上に国民の補綴歯科治療に対する認知を期待するとのお言葉をいただきました。そして、日本歯科医師連盟 高橋英登会長より、日本補綴歯科学会の益々の発展を祈念するとともに、これからの期待を込めて「頑張るぞー」の発声にて乾杯のご挨拶をいただきました。なお、祝賀

会内では、多数の祝電の紹介とともに、国際協定を締結している大韓歯科補綴学会からお祝いのビデオメッセージが上映され、理事長の June-Sung Shim 先生から祝辞をいただきました。そして、祝賀会の後半には、第32代理事を務められた平井敏博先生より「公益社団法人日本補綴歯科学会設立90周年記念に寄せて」と題し、Letter for Members, 歯科補綴学専門用語集, 社団法人化, 日本補綴歯科学会誌ならびに Journal of Prosthodontic Research の発刊をはじめとした、これまでの多岐にわたる本会の取り組みとその歩みを紹介いただき、今後のさらなる発展に期待を寄せていただきました。なお、祝賀会を終えるにあたり、大久保力廣副理事長より閉会の辞が述べられた後に、前理事長の馬場一美先生、新執行部(窪木拓男理事長, 細川隆司副理事長, 大久保力廣副理事長, 二川浩樹副理事長, 小宮山 道常務理事), そして本記念事業の準備にあたった上田貴之準備委員長が全参加者をお見送りし、本祝賀会は盛会裏に終わられました。本当に多くの先生方より、これからの日本補綴歯科学会への期待を込めた熱いエールをいただくとともに、本祝賀会で随所に見られた会員の団結力をみるにあたり、本会のみならずの発展を確信することができたように思います。会員の皆様におかれましても、今後とも何卒お力添えをよろしくお願いいたします。

(広報委員 和田誠大)



二川浩樹副理事長による開会の挨拶



窪木拓男理事長による主催者挨拶



来賓挨拶
(柳川忠廣 日本歯科医師会副会長)



来賓挨拶
(住友雅人 日本歯科医学会会長)



来賓挨拶
(今井 裕 日本歯科専門医機構理事長)



高橋英登 日本歯科医師連盟会長
による乾杯の挨拶



大韓歯科補綴学会理事長 June-Sung Shim 先生からのビデオメッセージ



平井敏博先生 (第32代理事長)
による記念講演



記念祝賀会の風景



大久保力廣副理事長による閉会の挨拶



祝賀会参加者のお見送り風景



●公益社団法人日本補綴歯科学会

設立 90 周年記念マスコットキャラクター

2022 年 9 月から募集を開始していた日本補綴歯科学会設立 90 周年記念マスコットキャラクターの募集が 2022 年 12 月 15 日に締め切られました。2 段階に及ぶ厳正な審査を行い、10 作品に絞られた候補作品の中から学会員による投票によって、最優秀賞 1 作品および優秀賞 4 作品が決定しました。応募期間は 3 か月程度で比較的短く、2 つのキャラクターで 1 作品であり、日本補綴歯科学会のマスコットにマッチした作品という条件付きであったにもかかわらず、400 件を超える応募があり、非常に注目度の高いイベントとなりました。

募集したマスコットキャラクターは、補綴歯科治療の技術力を象徴する「補綴くん」と、豊かな知識力を象徴する女神である「プロソちゃん」の兄妹キャラクターです。400 件を超えるすべての作品を見終えるまでに相当な時間がかかりましたが、どれも素晴らしく、大変見ごたえのあるものばかりでした。その中から選ばれた栄えある最優秀作品には、学会員のみならず、一般の方々にも末永く愛されていくことを切に願

ます。

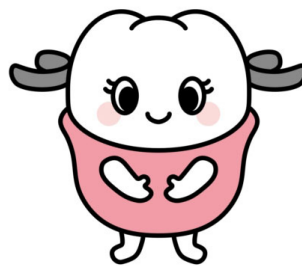
マスコットキャラクターは英語で mascot と表記し、一般的には企業等のシンボルとなるキャラクターを指します。今後、本学会が主催するさまざまなイベントや各種のグッズのデザインとして活用されていくことで、多くの人々の目に触れることとなり、補綴というあまり一般的ではない言葉を社会に広めていってくれる一つの切っ掛けとなってくれることでしょうか。実際に補綴治療は多くの人の口腔内に施されていますが、補綴処置をされたという認識を持っている人はほとんどいないのではないのでしょうか。自分が使っている義歯も装着されたジルコニアも補綴装置であるという、認識を持ってもらうためにも、学会マスコットキャラクターに沢山活躍していただきたいと思います。mascot は、前述の企業等のシンボルという意味の他に、縁起の良い人（動物や物）、開運のお守りのように身近に置いておく人や物という意味があります。学会マスコットキャラクターが身近に置かれることで補綴そのものも人々の身近なものになっていただきたいと思います。

(社会連携委員長 飯沼利光)

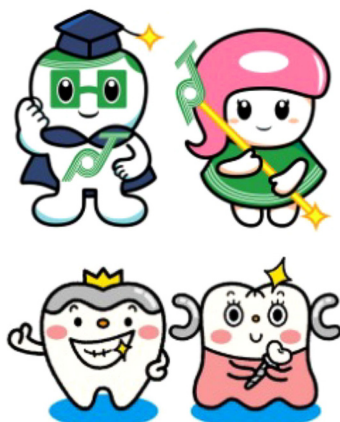


補綴くん

最優秀作品



プロソちゃん



優秀作品



令和5年度定時総会

令和5年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会は2023年6月11日(日)に帝国ホテル東京菊の間にて執り行われました。本年度は5月に開催された臨時総会と同様に年2回開催される総会を対面形式にて開催する運びとなりました。また、当日は設立90周年記念事業が執り行われる直前の開催となり、多くの社員の皆様に参加いただきました。

定時総会には出席65名、委任状出席146名、合計211名(社員総数277名)のご出席をいただき、議決権の行使も順調に行うことができました。定時総会では細川隆司副理事長の当日の天気には掛けた参加者を和ませる開会の辞に始まり、議長は明海大学歯学部の藤澤政紀先生が務め、司会は総務が担当する形にて進行させていただきました。報告事項として、令和4年度事業報告の件を総務より報告し、決議事項として令和4年度計算書類(貸借対照表および正味財産増減計算書)および財産目録承認の件、理事選任に関する件、監事選任に関する件についてお諮りさせていただき、承認多数で可決されました。本来ならば所掌の

理事、委員長から委員会活動報告を行いますが、5月に開催された学術大会時の臨時総会にて執り行われておりましたので、定時総会では定款にて定める事項を決議するのみの形式とさせていただきました。閉会の辞では窪木拓男副理事長より、馬場一美理事長のリーダーシップを称える挨拶がなされ、無事に閉会となりました。定時総会終了後に監事、理事長への感謝状の贈呈が執り行われ、馬場一美理事長の任期が終了となりました。

なお、感謝状の贈呈後に開催されました令和5年度第2回臨時理事会において、理事長、副理事長、常務理事、委員長、委員、幹事の選定が決議され、窪木新理事長による新たな運営が始まり、臨時理事会終了後に設立90周年記念事業の記念講演会、記念祝賀会が催される一日となりました。

最後に、議長として円滑に議事を進めていただきました藤澤政紀先生、ご出席いただきました社員の皆様、本学会会員の皆様にこの場をお借りしてあらためて深く御礼申し上げます。(総務担当 小見山 道)



水口俊介監事への感謝状の贈呈



馬場理事長への感謝状の贈呈



定時総会会場の風景

渉外委員会報告

● The 88th Pacific Coast Society for Prosthodontics (PCSP) Annual Meeting 参加報告

2023年6月28日から7月1日の4日間、The 88th Pacific Coast Society for Prosthodontics (PCSP) Annual MeetingがWhistler (BC, Canada)で開催されました。Whistlerは、Vancouver国際空港から車で2時間ほどの山間部に位置し、2010年のバンクーバー冬季オリンピックが開催されたカナダ屈指のスキーリゾート地です。PCSP会期中は爽やかな天候に恵まれ、夏休みシーズンに7/1のカナダの祝日(Canada day)が重なり、多くの観光客で賑わっていました。

Whistlerの先住民であるSquamish族とLil'wat族の伝統的な音楽パフォーマンスとともに開会したPCSP2023は、“Prosthodontics and Wellness in Whistler”というテーマを掲げ、基礎から臨床まで補綴学に関するさまざまなトピックをカバーしたプログラムでした。JPSからは、馬場一美前理事長がinvited speakerとして“Current Status and Future of Digital Dentistry”というタイトルで講演され、歯科におけるデジタルテクノロジーの可能性をDatabase-driven Oral Rehabilitationという次世代の補綴治療には欠かせないキーワードとともに紹介されました。また、JPS特別ポスターセッションが設けられ、9演題の発表が行われました。ベテランの先生方だけでなく、若手の先生方も多く発表され、PCSPの著名な先生方との積極的なディスカッションが繰り広げられていました。最終日に、PCSP2023-2024期のPresidentのDr. Amerian Sones

にお会いした際、JPSの発表はどれも本当にすばらしかったとお声がけいただき、JPSのエネルギー溢れるプレゼンスを十分にPCSP2023でアピールできたと感じました。

海外では、ネットワーキングが研究者として必要不可欠な重要なスキルとして考えられており、学会では新たな知り合いを作ったり、久しぶりに会う他大学の知人や友人とお互いにアップデートをします。PCSP2023初日トップバッターで登壇されたUniversity of MontrealのDr. Gilles LavigneはSleep Dentistryの第一人者で、私自身がブラキシズムの研究に従事していることと、友人がLavigne先生のラボのPhD studentだったこともあり、以前からディスカッションする機会がありました。実に4年ぶりの再会で、一緒にランチを食べながらお互いのアップデートができたのも個人的ハイライトでした。自身の研究分野のトップランナーの先生と直接ディスカッションできるのが国際学会での発表の醍醐味ですので、若手の先生方には積極的なチャレンジを強く推奨します。プログラムのない時間帯に会場近くからケーブルカーに乗って山頂でハイキングして気分転換をし、1日目の夜にJPSディナーを企画していただき、JPSの先生方との親睦を深めることもできました。

今回のPCSPは2024年6月19日から22日にMonterey (CA, USA)で開催予定です。JPSからも多くの先生方が参加され、PCSPとJPSの親交が継続し、またJPSのアカデミックな活動を世界にアピールできることを期待いたします。(渉外委員 島田明子)



市民フォーラム2023

2023年5月19日(金)から21日(日)の日程で、日本補綴歯科学会第132回学術大会—設立90周年記念大会—がパシフィコ横浜で、現地開催+ライブ配信というハイブリッド形式で開催されました。今回のテーマは全大会と同様、「補綴の未来、歯科の未来、“Society 5.0に向けたイノベーションの創出”」ということで、補綴歯科医療が、“仮想空間と現実空間を融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する社会を目指す取り組み”であるSociety 5.0とこれからどう向き合うべきかについて考える、素晴らしい大会となりました。そこで市民フォーラムも、昨年と同様にWeb形式での情報発信を国民の皆様に向け行いました。

ところで皆さん、「補綴歯科専門医制度」が日本歯科専門医機構により正式認定されたとのうれしいニュースはすでにお聞きになられていることと思います。

そこで今回の市民フォーラムのタイトルは、“「補綴歯科専門医」って何?”で、補綴歯科専門医の広告開示がいよいよ開始されることに歩調を合わせたタイムリーな企画といたしました。

歯科診療領域における専門医とは、「それぞれの専門領域において適切な研修教育を受け、十分な知識と経験を備え、患者から信頼される専門医療を提供できる歯科医師」と定義されています。このような観点から、専門医制度の目指すところは、国民に信頼され、

歯科診療を受診する際の歯科医院選びの良い指標となることを目指しています。そのため、プロフェッショナルオートノミー(専門家集団における自律性)に基づいた歯科専門医の質を保証・維持できる制度でなくてはならないとされています。

これに関し、学会活動などを通じて歯科医師は専門医制度の社会的意義や重要性を十分理解しているものと思われませんが、受益者である国民にとっては、今一つ何が持たされるか、さらにその活用性については十分かつ明確に理解されていない制度であることが懸念材料として挙げられています。

そこで、本企画では専門医制度についての説明と、どのような歯科医師がその資格認定を受け、患者の皆様には何が持たされるのかについて、わかりやすく解説いたしました。

とくに今回の目玉企画としては、一人の補綴歯科専門医を目指す若き歯科医師をクローズアップし、指導医からの熱意ある指導が、有能な補綴歯科専門医を育ててゆく過程をドキュメンタリータッチで追いながら、専門医制度が持つ意味について解説いたしました。

この「市民フォーラム2023」は、学術大会期間ならびに終了後10日間配信が行われました。今後、各支部会においても配信が行われ、多くの一般市民の方に加え、歯科医療従事者、さらに将来歯科医師を目指す学生の皆様にもご覧いただければ幸いです。

(社会連携委員長 飯沼利光)



第5回JPS SCSC (Student Clinical Skills Competition) 開催報告

日本補綴歯科学会が歯学部学生の臨床技能向上を目的として、企画している JPS SCSC (Student Clinical Skills Competition) も今年で5回目となりました。2019年より開始された JPS SCSC は、第2回、第3回は新型コロナウイルス感染拡大の影響から一次審査のみでしたが、昨年度の第4回に引き続き今年も二次審査を開催することができました。

まず、全国の歯科大学・歯学部から学生代表者1名を推薦してもらい、2023年3月31日(金)までに指定された課題(下顎左側第一小臼歯のハイブリッドレジンでのCAD/CAM冠を想定した支台歯形成)を提出していただき、学術委員会および教育問題検討委員会にて一次審査を行いました。本年度は25校が参加しました。本コンペティションは、新時代に即した技能教育における正当な評価方法について、各大学の垣根を超えた教育者間での共有も重要な目的としています。その結果、上位の学生6名を選抜し、二次審査を2023年6月4日(日)にGCコーポレートセンター(東京都文京区)にて実施しました。

二次審査の当日は、ファイナリストとなった学生6名が朝9時に集合し、鮎川保則教育問題検討委員長の熱い激励を込めた開会の辞で参加学生も静かに闘争心に火を灯して、二次試験(30分間の支台歯形成)に臨みました。試験終了後に直ちに形成された人工歯をスキャンし、データを北海道にいる委員へ転送しました。形成前後のSTLデータから算出したクリアランスや軸面テーパ角等を解析しました。このような遠隔での解析もデジタル時代ならではの解析でしょう。その結果をもとに、両委員会から構成された

6名の審査員が総合評価し、上位3名を選考して表彰状と副賞を授与しました。なお、審査中の時間を利用して、学生は大久保力廣学術委員会委員長によるデジタルデンティストリーに関する講義を受講しました。審査結果は下記の通りとなりました。

最終選考最優秀賞1位：藤田沙世さん(東歯大)
 最終選考最優秀賞2位：大巻真幸さん(北海道大)
 最終選考最優秀賞3位：園田彩乃さん(長崎大)
 最終選考優秀賞：木下実咲さん(九州大)
 福井智子さん(新潟大)
 横山 史さん(鶴見大)

二次審査に進出した6名の技能はいずれも素晴らしい支台歯形成であり、作品を見た瞬間に審査員一同が思わず「上手いな…」と呟いてしまうほどでした。学生達の日頃の修練と担当教員の指導の熱が伝わってくるようでした。年々作品のレベルが上がっているようにも感じます。本コンペティションを目標とすることでスキルアップに寄与しているのかもしれませんが、学生達には今回のコンペティションに参加したことを誇りにしてさらに修練を重ねていただき、未来の補綴歯科臨床を担うような歯科医師を目指してほしいと思います。

最後になりますが、ご引率いただいた付き添いの先生方と会場の提供と資材を提供いただきました株式会社ジーシーはじめ、協賛いただいたストロマン・ジャパン株式会社、和田精密試験株式会社、ペントロンジャパン株式会社、医歯薬出版株式会社(順不同)に深く感謝を申し上げます。(学術委員会幹事 佐藤洋平)



静謐な中に参加者の熱気がほとぼしる。



真剣な眼差しで形成に挑む参加学生。



表彰式後の集合写真。学生の笑顔が眩しい。

令和4年度学会優秀論文賞, 第132回学術大会優秀賞 受賞者の声

令和4年度 優秀論文賞



渡邊 恵 (徳島大)

市川哲雄 (徳島大)

Semaphorin 3A: A potential target for prevention and treatment of nickel allergy

Communications Biology Jul 7; 5 (1): 671, 2022, doi.org/10.1038/s42003-022-03641-0



この度は令和4年度優秀論文賞を賜り、大変光栄に存じます。

歯科治療のメタルフリー化が急速に進む中でも、歯科用金属アレルギーは依然として補綴歯科治療を難しくする疾患です。治癒することがないため、症状の軽減を目指して治療を進めることとなりますが、病態形成のメカニズムが解明されれば、発症を防ぐことは難しくても治癒につながる治療方法を見つけることは可能ではないかと思えます。

渡邊は2000年頃からモデルマウスを開発し金属アレルギーの免疫研究に取り組んでおります。今回の論文では、上皮ケラチノサイトに発現するセマフォリン3A (Sema3A) が金属アレルギーの発症を促進していることを明らかにしました。金属アレルギーの病態形成は、金属が皮膚や粘膜に触れるところから始まります。そこで、モデルマウスの皮膚や培養上皮ケラチノサイトを代表的な金属抗原であるニッケルで刺激するとSema3Aの発現が上昇し、皮膚や培養ケラチノサイトのSema3Aを特異的に欠損させるとアレルギー症状が緩和されました。この結果は、Sema3Aが金属アレルギーの発症を促進することを示しており、金属アレルギーの予防と治療のための潜在的なターゲットとなる可能性を示唆しています。この受賞を励みに、今後さらに研究を進めたいと思えます。

最後になりましたが、本研究の遂行に多大な貢献をいただいた共著者および本学口腔顎顔面補綴学分野の先生方に心より感謝申し上げます。



田坂彰規 (東歯大)

山下秀一郎 (東歯大)

Retentive force of telescopic crowns combining fiber-reinforced composite and zirconia

J Prosthodont Res 2022; 66 (2): 265-271.



この度は令和4年度公益社団法人日本補綴歯科学会学会論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本研究は、ドイツのハイデルベルグ大学附属病院補綴科での留学中に実施した研究になります。これまでテ

レスコープクラウンは熟練した歯科技工士が歯科精密鑄造にて手作業で製作していましたが、近年のデジタルデンティストリーの発展によりヨーロッパを中心にCAD/CAM技術を用いてテレスコープクラウンを製作することが可能になりました。また、さまざまな材料で加工することができるようになったため、材料の選択肢が増えました。本研究ではテレスコープクラウンの内冠にジルコニアを、外冠にグラスファイバー強化型コンポジットレジン (FRC) を用いて維持力を検証いたしました。ジルコニア製の内冠とFRC製の外冠の組み合わせのテレスコープクラウンは適切な初期維持力を示しました。また、外冠のミリングパラメータの調整とミリング後の研磨が、ミリング後の維持力の調整時間や外冠の長期的な予後に大きく影響することが示唆されました。

最後になりましたが、本研究に際して、多大なるご指導を賜りました東京歯科大学パーシャルデンチャー補綴学講座の山下秀一郎教授ならびハイデルベルグ大学附属病院補綴科のPeter Rammelsberg教授, Stefan Rues先生およびFranz Sebastian Schwindling先生に厚く御礼申し上げます。

令和 4 年度
学会奨励論文賞



稲用友佳 (医歯大)
Knowledge acquisition efficacy of a remote flipped classroom on learning about removable partial dentures
J Prosthodont Res 2022 (Epub ahead of print).

この度は、令和 4 年度 (公社) 日本補綴歯科学会奨励論文賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。

近年、学生の能動的な学修により、より高い認知レベル到達を目指すアクティブラーニングが普及しています。しかし歯科補綴学教育では、一方向性の講義形式の授業が主流です。一方コロナ感染拡大の影響で、情報通信技術を用いた遠隔教育システムの導入が急速に進展しました。しかしながら、遠隔でのアクティブラーニングが対面と同様の効果があるかは検証されていません。

当大学では、2013 年から部分床義歯補綴学にラーニングマネジメントシステムを利用した反転授業を導入しました。2017 年度から 3 年間、講義授業と反転授業の学習効果を比較するランダム化比較試験を実施し、コロナ禍の 2020 年度は、完全遠隔での反転授業の学習効果を検証しました。その結果、部分床義歯補綴学の知識導入に関して、反転授業は遠隔形式であっても、講義授業よりも学習効果が高いこと、eラーニングへのモチベーションの高さが知識導入に重要な因子であることが示唆されました。さらに遠隔形式でのグループワークは、対面形式よりも高い学習効果を得られる可能性が示唆されました。本受賞を励みとして、今後の歯科補綴学の教育研究に少しでも貢献できれば幸いです。

最後にご指導を賜りました生体補綴歯科学分野の若林則幸教授、咬合機能健康科学分野の笹木賢治教授、ご協力いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。



飯泉亜依 (昭和大)
Three-dimensional evaluation of sleep bruxism-related splint wear using a dental laboratory scanner: A preliminary clinical study
J Oral Rehabil 2023; 50 (2): 122-130

この度は日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして奨励論文賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム (以下 SB) によって生じる過大な咬合力は、歯や歯周組織など顎口腔系の諸器官にさまざまな障害や補綴装置の破損を引き起こす可能性があると考えられています。臨床現場では、口腔内所見や問診のみで SB の診断を行うことから、SB を正確に診断し、患者個々の SB の重症度や頻度を評価するのは難しいとされております。そこで、本研究では、SB の管理に標準的に用いられているスプリントの咬合面に生じた摩耗を定量化し、SB レベルとの関連性を明らかにできれば、スプリントの形態変化を指標として SB 評価が可能であると考えました。その結果、金属フレームを有するスプリントを併用した三次元形態解析により、スプリントの咬合面に生じた摩耗部位の視覚化、最大摩耗深度、摩耗面積、摩耗体積の経時的変化の定量的評価が可能となりました。また、Portable PSG を用いた SB 筋活動との関連性を解析した結果から、摩耗面積を評価することにより SB の強度ならびに持続時間を予測できる可能性が示唆されました。本研究結果が SB 臨床診断の一つの評価方法として臨床に貢献出来れば幸いです。

最後に、本研究の遂行に際し多大なるご指導ご鞭撻賜りました本学歯科補綴学講座の馬場一美教授、そしてデジタルチーム、ブラキシズムチームの先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。





小原大宜 (昭和大)

Effects of vibratory feedback stimuli through an oral appliance on sleep bruxism: a 6week intervention trial

Sleep Breath 2022 Jun; 26(2): 949-957.

この度は、令和4年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム (SB) により生じる過大な咬合力は顎口腔系にさまざまな為害作用を及ぼすため、臨床ではオクルーザルスプリント (OS) 療法が選択されることが一般的です。しかし、それだけではSBを抑制することはできず、重度のSB患者ではそのスプリントさえも破壊してしまうことがあります。そこで我々は振動刺激を用いたバイオフィードバック療法に着目し、通常用いる OS 内に感圧フィルムを埋め込み、スプリントのひずみに対応して OS へ振動刺激が付加される仕組みの装置を開発し、そのSB抑制効果を検証しました。結果として振動刺激は、睡眠を障害することなく60%前後のSB抑制効果を示し、本来OSが有する歯列保護効果と組み合わせて用いることは臨床的に非常に有用であり、SBの管理に有効な方法であることが示唆されました。しかし、顎関節症状などの臨床徴候がある患者に対しての改善効果は不明のため、今後はそのような患者に対して本装置を適用した際の効果を明らかにする必要があると考えております。本研究の結果が、SBに悩まされる患者や歯科医師の診療の一助となれば幸いです。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました馬場一美教授をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



JPR Best Paper Award 2022 (Review article category)



八田昂大 (大阪大)

Association between oral health and sarcopenia: A literature review
J Prosthodont Res 2021 Jun 30;
65(2): 131-136.

この度は、JPR Best Paper Awardに選出いただき、大変光栄に存じます。受賞に際して、査読や選考に携わったすべての方々に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

近年、サルコペニアは高齢者の要介護状態の初期兆候として注目されています。さまざまな研究で、口腔の健康がサルコペニアとその診断要素（握力、歩行速度、骨格筋量）と関連していると報告されています。しかしながら、口腔の健康とサルコペニアの関係は、まだ十分に調査されていません。本論文では、サルコペニアとその診断要素と口腔の関連について報告された文献を収集し、まとめました。現在報告されている研究のほとんどが横断研究でしたが、口腔健康は、サルコペニアおよびその診断因子と関連している可能性が高いと結論付けられました。今後は、より詳細な検証や長期的な追跡調査を通じて、口腔の健康とサルコペニアの関係性をさらに明らかにし、また、口腔の健康の改善が、サルコペニアの予防や管理にどのような効果をもたらすかについても、将来の研究で探求していく必要があります。

最後になりますが、本研究に際してご指導賜りました池邊一典教授、ならびに研究に協力していただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。



JPR Best Paper Award 2022 (Original article category)



三浦 賞子 (明海大)

Clinical evaluation of monolithic zirconia crowns: a failure analysis of clinically obtained cases from a 3.5-year study

J Prosthodont Res 2021; 65: 148-154.

2022年度JPR Best Paper Award Original Article部門の大変栄誉ある賞をいただき光栄に存じます。本受賞論文について、2021年から2022年にかけて多くの先生方に引用していただいたことに感謝申し上げます。

本論文は私の前所属である東北大学病院歯科咬合修復科で実施した、モノリシックジルコニアクラウンにより単冠修復した患者の短期前向き臨床研究です。短期の失敗や合併症の観点からモノリシックジルコニアクラウンの臨床成績を検討しています。さらに、臨床的に発生した失敗や合併症からモノリシックジルコニアクラウンのトラブルの原因を検出し、長期的な予後を得るための臨床上の注意点について考察しました。評価は、2014年4月から2018年7月までに装着された40クラウンについて行いました。追跡期間中、4クラウンに臨床的合併症が発生し、そのすべてが大白歯へ適用したクラウンに生じました。内容はクラウンの破折が2件、クラウンの摩耗が1件、対合歯の破折が1件でした。カプランマイヤー法による3.5年の累積成功率と生存率は、それぞれ90.5%と92.8%でした。破折したクラウンの破面解析から、破折は咬合面の摩耗段階から始まっていたことが明らかになりました。

以上の結果から、モノリシックジルコニアクラウンの大白歯への適用には、咬合面クリアランスの確保と対合歯が部分修復されている場合は咬頭破折の注意が必要であることが示唆されました。モノリシックジルコニアクラウンの今後の症例選択の参考になればと思います。



第132回学術大会 課題口演賞



加藤 (市川) 知香 (岡山大)

咬合支持の喪失による三叉神経中脳路核と青斑核の変化と認知機能低下のメカニズム

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきまして課題口演賞にご選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、日本は超高齢社会を迎え、認知機能が低下している高齢者は増加の一途をたどっています。大学病院の外来患者でも認知機能が低下している患者がみられ、認知機能低下の怖さや診療の困難さを痛感します。残存歯数が多いほど認知機能が高いことや、歯の喪失と高齢者の日常生活動作との間には関連性があることが報告されているため、歯の喪失と関連した認知機能低下のメカニズムの解明が急がれます。本研究では三叉神経中脳路核とそれに近接する青斑核に着目し、動物実験における認知機能低下のメカニズムを解明することを目的として行いました。ラットを用いた研究の結果、抜歯に伴う咬合支持の欠如によって歯根膜からの刺激が減少して三叉神経中脳路核の細胞数が減少し、近接する青斑核の細胞数も減少することで、大脳皮質や海馬へ投射するノルアドレナリン量の供給が低下して認知機能が低下する可能性が示唆されました。今後はラットに対し欠損部補綴を補うことで減少した青斑核およびノルアドレナリン量が回復するかどうかが、補綴修復による脳神経細胞の変化を研究したいと考えています。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただきました岡山大学医歯薬総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野の皆木省吾名誉教授、また直接研究をご指導いただきました原 哲也准教授に厚く感謝申し上げます。また、数多くの助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。





加藤雄人 (東歯大)

局部床義歯への応用を見据えた半焼結 Co-Cr 合金ディスクの精確さと機械的特性の検証

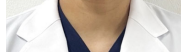
この度は、日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、開発された CAD/CAM 用の半焼結型コバルトクロム合金ディスクは、チョークのような軟らかい状態のディスクをミリングした後に最終焼結を行うため、作業時間の短縮や切削バーの損耗を最小限に抑えて補綴装置の製作を行うことが可能です。すでに半焼結型コバルトクロム合金ディスクをミリングして製作したクラウンやインプラント上部構造は良好な適合が得られたと報告され、固定性補綴装置においては臨床応用が進んでいます。本研究では、半焼結型コバルトクロム合金ディスクを局部床義歯の製作に応用することを目的とし、支台装置の精確さと引張試験による機械的特性について、従来の鋳造と完全焼結型コバルトクロム合金ディスクを用いてミリングしたものと比較し、検証しました。その結果、半焼結型コバルトクロム合金ディスクをミリングして製作した支台装置の精確さは、レスト部で良好な値を示し、機械的特性は ISO 規格で定める Type4 金属の基準を満たすことが明らかとなりました。今後はさらに精確さを向上させる手法や臨床応用を想定した維持力の経時的変化を検証したいと考えております。

最後に、本研究の遂行に当たりご指導いただきました東京歯科大学パーシャルデンチャー補綴学講座の山下秀一郎主任教授、田坂彰規准教授、岡野日奈助教、並びに貴重な意見を賜りました多くの医局員の先生方、また株式会社リアリティ・デンタル・ラボラトリーの鶴澤 忍様に深く感謝申し上げます。

北川若奈 (岡山大)

1 細胞解析を応用した骨髄老化によるマウス長管骨創傷治癒遅延メカニズムの解明



この度は日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

骨髄の老化は、骨量低下や抜歯窩および骨折などの創傷治癒における治癒不全を引き起こすことが知られ

ており、超高齢社会に突入して久しい我が国において、骨・骨髄組織における老化のメカニズムを解明することは重要な課題とされています。そこで今回は、1 細胞レベルで網羅的な遺伝子発現解析が可能な single cell RNA-seq を応用し、骨髄の老化および創傷治癒過程における細胞の変化を解析しました。その結果、高齢骨髄の特徴として、これまで報告されていた間葉系幹細胞の質的变化の他に、血球系細胞との細胞相互作用の低下や、創傷治癒過程における細胞の挙動の遅延、さらには治癒過程において特異的な単球が確認され、骨髄の加齢変化および創傷治癒遅延に影響している可能性が示唆されました。今後は血球系細胞の更なる解析を進めるとともに、データ解析をもとにした *in vivo*, *in vitro* での検証を進めていきたいと思っております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、本学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、分子医化学分野の大橋俊孝教授、大野充昭准教授をはじめ、数多くの御助言、御協力をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



関 大蔵 (東北大)

20 歳未満高齢者の死亡発生に対する口腔の形態と機能回復の効果：17 年間のコホート研究

この度は、日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして、課題口演賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。

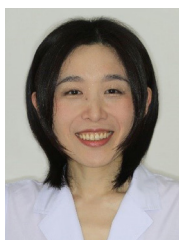
80 歳以上の高齢者にとって現在歯を 20 歯以上維持することの優位性は、これまで数々の研究によって立証されてきました。8020 運動は高い認知率や 8020 達成者の割合の上昇などに表されるように大きな成功を収めています。一方で、達成率は 51.2% であり、未だ半数近くの 80 歳以上高齢者は 20 歯を維持できていません。これら現在歯の欠損により、健康アウトカムにリスクが生じた高齢者に対し、補綴治療によって 20 歯以上を保持する高齢者と同等にまで健康アウトカムの向上を図ることはできるのでしょうか。形態や機能の回復に着目し検証することにしました。

統計解析の結果、現在歯数を 20 歯以上維持する高齢者と比較して、現在歯数 19 歯以下かつ機能歯数 27 歯以下、現在歯数 19 歯以下かつ最大咬合力 200 N 未満、現在歯数 19 歯以下かつ主観的咀嚼能力

良好の場合、死亡発生のリスクが高いことが示唆されました。

今後は 8020 未達成者の現在歯数の欠損を補えるような具体的な目標を提示できるよう調査を継続したいと考えております。

最後に本研究の遂行にあたりご指導を賜りました東北大学大学院加齢歯科学分野・服部佳功先生、大井孝先生、小宮山貴将先生をはじめ、多大なるご助言やご協力をいただきました同医局の先生方に厚く御礼申し上げます。



高嶋真樹子 (新潟大)

小さなゴニアルアングルはインプラント後期喪失の予測因子である：後向き観察研究

この度は、日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして課題口演賞に選出いただき大変光栄に存じます。

インプラント後期喪失の最も一般的な病因はインプラント周囲炎と咬合過負荷であり、さらに咬合過負荷はインプラント周囲炎の予測因子であることが報告されています。そこで我々は、インプラントの後期喪失のリスク因子としてインプラント治療患者の咬合力を調査することにしました。しかし欠損歯のあるインプラント治療患者の咬合力は術前に正確に測定することは困難なため、咬合力に密接に関連する解剖学的因子とインプラント後期喪失の関連について検討することにしました。初めに CT データから測定した咬筋の断面積が大きいほどインプラントの後期喪失のリスクが高くなることを症例対照研究で報告しました。そして本研究では、CT 撮影よりも簡便な方法として、パノラマエックス線から測定できるゴニアルアングルとインプラント後期喪失の関係について調査し、ゴニアルアングルが小さい患者はインプラント後期喪失のリスクが高いことを明らかにしました。今後より詳細な検討を行い、インプラントによる補綴治療の術前評価に貢献できる研究を続けていきたいと考えております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導賜りました口腔生命福祉学分野の濃野 要教授、顎口腔インプラント治療部の荒井良明准教授をはじめ、研究遂行にあたり数多くのご協力を賜りました諸先生方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



吉原靖智 (徳島大)

睡眠時ブラキシズムと意識下における側方滑走運動の水平面顎運動軌跡の比較

この度は日本補綴歯科学会第 132 回学術大会において、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。徳島大学顎機能咬合再建学分野では以前より睡眠時ブラキシズム (SB) 中の顎運動について研究・報告を行っており、今回の受賞は今までの先人の研究を含めて皆様に認めていただいた結果だと存じます。

SB は顎口腔系に大きな為害作用をもたらしますが、計測の困難さから、SB の顎運動に関する研究はあまり行われておりませんでした。本研究では睡眠中の模擬運動 (模擬グライディング) 経路と睡眠中の閉開口の滑走運動経路を水平面で重ね合わせ、滑走運動の逸脱の頻度とその時の筋活動の特徴について報告しました。

その結果、前方にも後方にも模擬グライディングを逸脱した滑走運動を認めました。SB 中のこのような運動が、模擬グライディングと一致しない咬耗面を形成している可能性があります。また、模擬グライディングの後方を運動する場合、咬筋活動量が大きくなる傾向がありました。今後は被験者数を増やし、より詳細な分析を行っていく所存です。

最後に本研究成果を発表させていただく機会を与えてくださいました松香芳三教授、そしてご指導いただいた鈴木善貴講師、共同演者の皆様、ご協力いただきました当分野の先生方に感謝の意を表しますとともに、御礼を申し上げます。

第131回学術大会 課題口演優秀賞



明間すずな (大阪大)

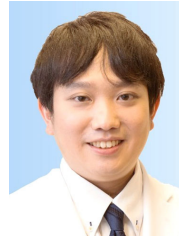
咀嚼能率と心理的フレイル発症の関連の検討

—6年間の前向きコホート研究—

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出していただき大変光栄に存じます。また、ご選考いただきました先生方、学会の皆様方に改めて御礼申し上げます。

フレイルの予防は、高齢者において重要な課題となっています。これまでに、口腔機能と身体的フレイルとの間に有意な縦断的関連があることが示されていますが、フレイルの側面の一つである心理的フレイルと口腔機能との関連を報告した研究はありません。

本研究では、自立した地域在住高齢者を対象とするコホート研究より、身体的・社会的背景などの交絡因子を考慮したうえで、咀嚼能率や残存歯数が、高齢者の心理的フレイル発症に与える影響を縦断的に検討しました。その結果、咀嚼能率の高さ、あるいは残存歯数で調整した咀嚼能率の高さは、背景因子を調整したうえで、心理的フレイルの発症と負の相関があることが示されました。今回の受賞を励みにし、今後はこれらの知見に関してより詳細な検討を行うことで、補綴歯科治療による咀嚼機能の回復が、心理的フレイル予防の一助となることを示していきたいと考えております。最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました池邊一典教授、豆野智昭助教授ならびに研究遂行にあたり数多くの助言やご協力をいただきました諸先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



伊東紘世 (東歯大)

純チタンを局部床義歯フレームワークへ応用する際の最適なCAD/CAM技術の検討

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出していただき、大変光栄に存じます。2022年にアレルギー疾患対策の推進に関する基本的な指針のアレルギー疾患医療を提供する体制の確保に関する事項が改正され、医療提供体制の中に歯科医師が明記されました。これらより金属アレルギーを発症しにくい純チタンの補綴装置の提供は重要であると考えます。しかし、鋳造に高度な技術を必要とする純チタンは、臨床では普及しているとは言えません。そこでCAD/CAM技術を応用した純チタン局部床義歯フレームワークの製作方法を確立するために本研究を行いました。

本研究では、①純チタンディスクの切削加工、②レジンパターンを積層造形後、埋没し鋳造、③ワックスパターンを切削加工後、埋没し鋳造、④純チタンパウダーの積層造形、以上の4つの方法で製作し、マクロかつミクロな視点で評価し、最適な方法の検討を行いました。その結果、①の純チタンディスクを切削加工する方法が最も優れると示唆されました。今回の受賞を受け、最適な切削加工の検討等を行い、補綴治療の発展に貢献できる研究を続けたいと存じます。

最後に、御指導を賜りました東京歯科大学パーシャルデンチャー補綴学講座の山下秀一郎教授、田坂彰規准教授、小林 裕助教、並びに貴重なご意見をいただいた医局員の先生方に深く感謝を申し上げます。また、研究に多大な御協力を賜りました和田精密歯研株式会社の仲田誠一様に重ねて感謝申し上げます。



近藤 威 (東北大)

口腔粘膜における特定歯肉線維芽細胞集団による免疫機構

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出していただき、大変光栄に感じております。また、選考いただきました先生方には心より感謝申し上げます。

補綴歯科治療を長期的に成功させるためには、口腔粘膜における炎症反応の制御およびそのための生体防

御機構の理解が重要です。本研究では、シングルセル RNA シーケンス解析を用いて口腔粘膜における生体防御機構の一細胞レベルでの機能解明を行いました。その結果、我々は口腔粘膜において歯肉線維芽細胞は複数の集団で構成されており、その中の一つの集団が好中球や自然リンパ球を活性化することで口腔粘膜の炎症および歯槽骨の吸収を促進することを明らかにしました。本研究で得られた知見は、歯周炎の進行機序解明に大きく寄与することが期待されます。また、これら知見は、骨再生や抜歯窩治癒過程における免疫機構と共通することが予想されるため、今後は自然免疫制御を応用した骨造成やインプラントのオッセオインテグレーションの更なる向上を目的として、研究を進めていきたいと考えております。そして、補綴歯科分野において免疫学的アプローチから骨代謝を制御する新たな領域を開拓したいと思います。

末筆ですが、本研究を遂行するにあたり、多くのご指導を賜りました UCLA の Ichiro Nishimura 教授、東北大学の江草 宏教授をはじめ、ご協力いただきました先生方には心から感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第 132 回学術大会 デンツプライシロナ賞



柏崎健汰 (医歯大)

全部床義歯の咬合平面予測における切歯点の予測精度評価

この度は日本補綴歯科学会第 132 回学術大会におきまして、デンツプライシロナ賞を賜り大変光栄に存じます。

ます。

全部床義歯製作工程のデジタル化の発展により多くの作業の自動化が実現されているものの、仮想咬合平面の設定は手作業で行われているのが現状です。

スキャンされた無歯顎顎堤データから人工歯配列を行うためには、仮想咬合平面の設定は必須の工程ですが、顎間関係記録時のエラーの可能性を考慮して、無歯顎顎堤データのみから咬合平面を自動的に求めることが可能になると、人工歯配列や歯肉形成のやり直しの頻度を減少させることが可能になると考えられ、更なる医療の均質化・効率化に貢献できると言えます。また、仮想咬合平面を決定する 3 点のうち、後方基

準点は臼後隆起が存在するため、前方基準点 (切歯点) を自動的に特定できれば咬合平面を求めることができると考えられます。そこで、本研究では、上下顎の全部床義歯のデータを利用して、切歯点の位置の予測し、予測値の精度評価を行いました。

その結果、顎堤上のランドマークは、デジタル全部床義歯の咬合平面決定の指標として利用できる可能性が示唆されました。この受賞を励みに、本研究の臨床応用については更なるデジタル全部床義歯の発展に貢献できるよう精進して参ります。

最後に、本研究に際しご指導賜りました高齢者歯科学分野の水口俊介教授、口腔デジタルプロセス学分野の金澤 学教授、臨床研究チームの先生方、ご協力いただきました先生方と参加者の方々に厚く御礼申し上げます。



穴戸駿一 (東北大)

モノリシックジルコニアクラウン表面の結晶構造変化と残留応力の分析

この度は、日本補綴歯科学会第 132 回学術大会において、優秀ポスター賞 (デンツプライシロナ賞) にご選出いただき、大変光栄に存じます。

歯科用ジルコニアは、イットリア含有量の増加により透光性が向上し、白歯部だけでなく前歯部においてもモノリシックジルコニアクラウンとして臨床応用されています。クラウン表面に対しては、研磨、研削、サンドブラスト処理が頻繁に行われます。これらの機械的表面処理がジルコニアの微細構造や機械的性質に影響を及ぼすことは、板状の試験片等を用いた研究で報告されていましたが、クラウン表面について詳細に評価した研究は多くありませんでした。

本研究では、研削による形態修正、研磨、内面のサンドブラスト処理を行ったモノリシックジルコニアクラウン表面について、イットリア含有量や板状試料との比較も含めて包括的に分析しました。その結果、視覚的に滑沢な表面が得られていても、形態修正や研磨による微細な傷が残存することで、表面の結晶構造変化による圧縮残留応力が存在することが示唆されました。本研究で得られた結果が、クラウンの機械的性質や生存率に及ぼす影響については、今後検討が必要です。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導をいただいた東北大学大学院歯学研究科の菅野太郎教

授, 中村圭祐准教授, 稲垣亮一講師, 並びに多大なるご助言やご協力を賜りました方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



AI-Omari Farah A. (長崎大)

副甲状腺ホルモンの口腔内投与はインプラント周囲硬軟組織治癒を促進する

Intraoral administration of parathyroid hormone improves osseous and soft tissue wound healing

around implants in ovariectomized rat maxillae

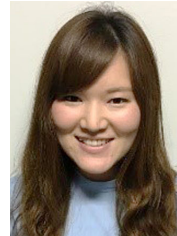
I am profoundly honored and delighted to extend my heartfelt gratitude to the committee for awarding me the prestigious Dentsply Sirona Award at the remarkable 132nd Annual Meeting of the Japan Prosthodontic Society. This recognition is a true testament to the dedication and passion that drives researchers like myself to contribute to the advancement of prosthodontics and dental science.

I am deeply indebted to my respected professor, Dr. Sawase, whose guidance, mentorship, and expertise have shaped my academic journey and research pursuits. I must also extend my heartfelt appreciation to my esteemed supervisor, Dr. Kuroshima, whose invaluable insights and encouragement have been instrumental in shaping the trajectory of my research. Their unwavering belief in my abilities and the opportunities provided have been pivotal in achieving this remarkable milestone.

I would be remiss not to express my sincerest gratitude to the exceptional research team at Nagasaki University, whose unwavering support, collaboration, and hard work have been instrumental in the success of our research endeavors. Their commitment to excellence and willingness to explore new frontiers have been the driving force behind our achievements.

Lastly, I wish to express my sincere thanks to Dentsply Sirona for their visionary support of the dental community and their commitment to promoting excellence in research. Once again, I am

sincerely honored to be the recipient of this esteemed award, and I promise to remain steadfast in my pursuit of excellence in the field of prosthodontics. This recognition serves as a powerful motivator to continue exploring new horizons and contributing to the betterment of dental science and patient care.



生田真衣 (日大松戸)

唾液中バイオマーカーを用いた覚醒時ブラキシズムとストレスの関連に関する検討

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライシロナ賞)に選出していただき、大変光栄に存じます。

ブラキシズムは歯のクレンチングやグライインディングを特徴とする繰り返しの咀嚼筋活動であり、この非機能的な咀嚼筋活動が咬合性外傷や歯根破折による歯の喪失や顎関節などの慢性の咀嚼筋痛を生じさせるリスクファクターとされています。しかしながら、現在のところ臨床の場では対処療法のみ行われているのが現状であります。本研究では、覚醒時ブラキシズムを発現させる因子として考えられるストレスと覚醒時ブラキシズムの相関を検討することを目的とし、覚醒時ブラキシズムの習癖を有する被験者の唾液を採取し、ストレスマーカーとなるコルチゾール、クロモグラニンA、 α アミラーゼ等の唾液中バイオマーカーを測定して主成分分析を実施しました。その結果、覚醒時ブラキシズム軽度～中等度の被験者と重度の被験者では、唾液成分構成に違いのある可能性が示唆されました。重度の覚醒時ブラキシズムの習癖を有する者は唾液成分において特徴的な成分構成を示し、ストレス応答が一部関与している可能性が考えられ、覚醒時ブラキシズムとストレスとの間に相関のあることが示唆されました。

最後に、ご指導をいただきました小見山 道教授、飯田 崇准教授に深く感謝申し上げます。また、本研究の遂行にあたりご協力をいただきました吉田一央先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。





土橋 梓 (新潟大)

培養歯根膜細胞における細胞外マトリックスのマルチオミックス解析

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきましてデンツプライシロナ賞に選出していただき大変光栄に存じます。

口腔機能において重要な役割を果たす歯根膜は、主に歯根膜細胞と細胞外マトリックス (ECM) から構成されています。“歯根膜細胞シート”は培養歯根膜細胞と分泌された ECM の複合体であり、歯周組織再生能を有することが報告されています。歯根膜細胞シートにおける細胞成分は、幹細胞を多く含有しているとされ、ECM 成分は歯根膜組織の組成がある程度保存されており、歯根膜組織に似た細胞外環境を作り出していると考えられるものの、その詳細は不明です。そこで私たちは、多階層の包括的データから、統合的な解析を行うことが可能なマルチオミックス解析を用いて、マウス歯根膜細胞シート (C-ECM) をマウス歯根膜組織 (T-ECM) と比較することにより、歯根膜細胞シートの特性の解明を試みました。

解析の結果、C-ECM では T-ECM と比較し、ECM の合成に影響を及ぼす経路が活性化されていただけでなく、内包する幹細胞にも活性化が生じていることが示唆されました。したがって歯根膜細胞シートはその多面的な機能により歯周組織再生に有効である可能性が示されました。今後は本研究で示唆された経路について、実験科学的手法により検証を進める予定です。

最後に、本研究の遂行にあたり御指導賜りました本学生体歯科補綴学分野の魚島勝美教授、加来 賢准教授をはじめ、ご指導いただきました先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



高橋 祐介 (九歯大)

抗 VEGF 抗体の応用が糖尿病に伴う口腔乾燥症へおよびす影響

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会におきましてデンツプライシロナ賞を賜り、大変光栄に存じます。

糖尿病患者に合併することの多い口腔乾燥症は、カリエスリスクの増加、歯周病やインプラント周囲炎の増悪および義歯の吸着困難など歯科補綴治療の際にリ

スクになることが知られています。本研究では、抗血管内皮増殖因子 (VEGF) 抗体ラニビズマブ (RBZ) を唾液腺に応用することで、唾液分泌機能の回復に有効か、2型糖尿病モデルマウスを用いて評価することを目的としました。

糖尿病 (DM) 群には生理食塩水を、実験群 (DM+RBZ 群) には RBZ (100 μg/kg) を実験 24 時間前に腹腔内投与し各種解析を行いました。Ex vivo 顎下腺灌流実験の結果、ムスカリン性刺激による唾液分泌量が RBZ 群で有意に増加することが明らかとなりました。また、DM 群の顎下腺導管細胞に過剰に発現していた水チャネルアクアポリン 5 が、RBZ 群では発現をほとんど認めませんでした。

以上の結果から、2型糖尿病モデルで導管細胞に過剰に発現しているアクアポリン 5 が、RBZ 投与により減少することで唾液分泌量が回復する可能性が示唆されました。今後は、抗 VEGF 抗体の応用が唾液分泌機能を回復するメカニズムの詳細を明らかにし、口腔乾燥症の治療ならびに歯科補綴治療の発展への寄与を目指して研究を進めていく所存です。

最後に、本研究を行うにあたりご指導いただきました九州歯科大学の細川隆司教授、宗政助教ならびに、本研究にご協力いただいた諸先生方に感謝申し上げます。



第 132 回学術大会 カボデンタル賞



細木 真紀 (徳島大)

デジタル化に対応したクラウン・ブリッジ補綴学実習の検討

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第132回学術大会においてカボデンタル賞をいただき、大変光栄に存じます。

当講座では、鑲着を用いた 2 ピースブリッジやメタルコア、ファイバーコア、レジン前装冠の作製など多岐にわたる実習内容を実施しています。これらの実習は、技能伝承マニュアルを参考にして作成した実習書に基づいて行われており、毎年、学生の評価やニーズなどをアンケート調査し、改変を加えています。近年、補綴学分野において、CAD/CAM や接着の教育は必須となってきました。そこで、2021 年度から実

習カリキュラムに、CAD/CAM冠の支台歯形成と、顎模型上で作製済CAD/CAM冠を試適・調整・装着する実習を追加しました。本研究は導入した実習内容に対する学生のアンケート調査結果を評価し、問題点を洗い出し、今後の実習内容および指導方法を検討しました。今後もCAD/CAMの導入は進み、デジタルデンティストリーの教育は不可欠と考えられます。現時点では模型メーカーによる実習用の既製品はなく、歯型にもCAD/CAM冠の支台はありません。受賞を励みに、今後さらに実習内容や方法を改変し、歯科補綴学の教育に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました松香芳三教授、協力してくれた学生の皆さん、熱意ある支援と貴重なご意見を賜りました共同研究者や多くの方々に心から感謝申し上げます。



白井麻衣（鶴見大）

歯周組織の安定と審美性に配慮した
スウィングウェッジアタッチメント
義歯

この度は、日本補綴歯科学会第132回学術大会優秀ポスター賞（カボデンタル賞）の受賞を賜り大変光栄に存じます。

歯科治療において、上顎前歯部の欠損補綴処置は高い審美性が求められます。しかしながら上顎前歯部欠損では歯槽骨吸収が著しく、固定性インプラント治療の場合は特に大規模な硬組織・軟組織移植が必要になる症例が散見されます。これらの治療は外科処置に抵抗がある患者の障壁となるため、可撤性補綴装置による治療を検討することになります。しかし、支台装置による審美不良を伴うことが多く、臼歯部を支台歯とすると審美不良は改善しますが、義歯床の面積が大きくなり、舌感・自浄性の低下を生じる可能性があります。

本症例では欠損隣接支台歯の欠損側アンダーカット（下部鼓形空隙）に維持機構を求めたスウィングウェッジアタッチメント義歯にて審美不良と咀嚼困難を改善し、さらに可及的に義歯床面積を小さくすることで残存歯の自浄性確保に努め、患者の高い満足を得ました。また、本支台装置は他の支台装置と比較して支台歯に側方力がかかりにくいと考えられ、適切な咬合状態と口腔清掃状態の管理を行うことで、長期の支台歯の安定が期待できると考えられます。

最後に本症例の遂行にあたり、ご助言を賜りました鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座の佐藤洋平臨床教授、ご協力を賜りました鈴木銀河助教、仲田豊生先生、煩雑な技工を担当していただいた野平勇人先生に心より感謝申し上げます。

『歯科補綴学専門用語集 第6版』が無料でダウンロードできます

既に JPS メールマガジン等でもお知らせしていますので、ご存知の会員の方も多いと思いますが、2023年6月に『**歯科補綴学専門用語集 第6版**』が発刊されました。そして、本用語集は、日本補綴歯科学会のホームページから、**無料でダウンロード**できます。学術論文、学術大会の抄録等の執筆時に、ぜひともご活用ください。

公益社団法人としての社会貢献と本会が推進するデジタル・トランスフォーメーションの一環として、2021年1月に、「**歯科補綴学専門用語集 第5版** (2019年 発刊)」の電子化を行い、同用語集のPDF版を学会ホームページ (<https://hotetsu.com/>) に公開しました。

最新刊の「**歯科補綴学専門用語集 第6版**」は、製本された書籍の販売と同時に学会ホームページ (<https://hotetsu.com/>) よりPDF版をダウンロードすることが可能となっております。社会貢献と補綴歯科学会のプレゼンス向上を目的とし、本会の会員だけでなく、歯学部学生、歯科領域の研究者、臨床家、教育者をはじめ一般市民の皆様にも自由に参照していただけるよう、無料ダウンロードが可能なたちをとっています。

PDF版は、紙の書籍ではできない、ソフトウェア上の検索機能が使用できることから、目的の用語を

検索するスピードが格段に上がりますが、以前は、「PCかタブレットを持ち歩いていないと見られない。」というPDF版に対する危惧もありました。しかし、現在は、ほとんどの国民がスマートフォンを持っているという時代背景の変化によって、PDF版用語集の利便性は格段に高くなっています。

肝心の具体的な改訂の内容については、各領域のトレンドを鑑みながら、デジタルデンティストリー、インプラント、摂食嚥下リハビリテーション、顎顔面補綴等の領域の用語を充実させるべく、数多くの関連用語を新規掲載しました。また、会員の先生方からいただいたパブリックコメントを参考に、現行の用語についても、修正を行いました。とりわけGPT-9との整合性をとるために、多くの時間を割きました。そのような過程を経て完成した「**歯科補綴学専門用語集第6版**」は、内容はもとより利便性の点からも、より完成度の高い専門用語集となっておりますので、研究、教育の場でおおいにご活用いただけることを祈念しております。末筆となりましたが、膨大な数のパブリックコメントを寄せてくださったボランティア精神にあふれる会員の先生方、新規用語の執筆ならびに現行用語の改訂にご協力いただいた先生方に深甚なる感謝の意を表します。(用語検討委員会 近藤尚知)



日本補綴歯科学会のホームページ
右端に「**歯科補綴学専門用語集**」のタブがありますので、こちらをクリックするとダウンロードページに移動します。(赤黄矢印)



用語集のダウンロードページ
右側の『**第6版PDF**のダウンロード(無償)はこちら』をクリックしてください。(赤黄矢印)
その下の「**医歯薬出版のホームページ**」に行くと購入サイトに移動しますので、ご注意ください。

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2023 開催報告

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2023が、3月10日(金)、11日(土)の2日間にわたり、KKR 鎌倉わかみや(神奈川県鎌倉市)において開催されました。この研修会は、若手会員育成のための研究に特化した会であり、学会として初めての試みとなります。対面形式での現地開催を企画していたため開催が二度も延期となり、会員の皆様にご心配をおかけしておりましたが、ようやく実現することができました。

事前のアンケート結果を参考にし、今回は2つの研究カテゴリー「歯科補綴学とQOL, 全身との関連」、「バイオロジー」にフォーカスを当てて開催しました。

特別講演では、江草 宏先生(東北大)に「歯科補綴学を“科学”で捉える」、古江美保先生(株セルミック)に「臨床応用に向けた持続可能な再現性ある基礎データを得るための細胞培養」、笛木賢治先生(東

医歯大)に「補綴臨床研究における口腔関連 QoL と今後の展望」と題してご講演いただきました。そして、口演発表では8題の発表があり、活発な質疑応答が交わされました。また、グループ討論・発表会では、「今後の日本補綴歯科学会のあり方について」をテーマとして、学会の問題点と対策について話し合っていました。

今回は密集を避けるため小規模な会となりましたが、スタッフ含め46名の参加者は、アイスブレイクですぐに打ち解けあい、情報交換会でも積極的に意見交換されていました。参加された先生にとって、他大学の先生方と知り合いになり、研究について情報交換できた有意義な会になったことと思います。今後、継続して開催されるようであれば、多くの若手の先生方に参加いただきたいと思います。どうか検討してみてください。(特命委員会 二川浩樹)



参加者とスタッフ



口演発表での質疑応答



6グループにわかれての討論・発表会

【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局(jpr-edit01@hotetsu.org)まで、メールにてお寄せください。

補綴関連講座・分野新教授紹介



飯田貴俊

北海道医療大学
歯学部生体機能・病態学系
摂食機能療法学分野
2023年4月1日

今年度から北海道医療大学にて『摂食機能療法学分野』のスタートに関わっております。飯田貴俊です。皆様にご挨拶できる貴重な機会をいただき、ありがとうございます。当分野では、摂食嚥下リハビリテーションに関する教育・臨床・研究を行います。簡単にこれまでの経緯を紹介いたします。日本大学歯学部摂食機能療法学講座に入局し、植田耕一郎教授と、当時同講座准教授の戸原 玄先生（現 東京医科歯科大学教授）から当該領域についてご指導いただきました。また、国内留学にて藤田保健衛生大学（現 藤田医科大学）医学部リハビリテーション医学Ⅰ講座の才藤栄一教授に師事し、次に米国 Johns Hopkins 大学医学部リハビリテーション医学講座に留学し、健常者の咀嚼時舌運動の研究を行いました。その後、神奈川歯科大学で『全身管理高齢者歯科』の立ち上げに参画し、2021年に北海道医療大学言語聴覚療学科に教授として赴任、そして大学内異動を経て歯学部に移って参りました。現在は訪問での摂食嚥下診療を開始したところです。まだ始まったばかりで、医局員もおらず実績も何もない状況ですが、今後は摂食嚥下の観点から歯科補綴学の発展に寄与できるよう、邁進して参りたいと思います。何卒よろしくお願い致します。

異動の度にお世話になりました水口俊介先生（東京医科歯科大学）、神奈川歯科大学時代にお世話になった井野 智先生、玉置勝司先生、宗像源博先生（現 昭和大学）、現在お世話になっている北海道医療大学の補綴歯科学会会員の皆様、そして関わらせていただいたすべての会員の皆様に心より感謝いたします。



高津匡樹

奥羽大学
歯学部歯科補綴学講座
2023年4月1日

このたび、奥羽大学歯学部歯科補綴学講座の教授を拝命いたしました。高津匡樹と申します。奥羽大学歯学部歯科補綴学講座では、山森徹雄主任教授とともに有床義歯学を担当しております。本紙面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、1993年に東北大学歯学部を卒業後、東北大学大学院歯学研究科に進学し、加齢歯科学分野（当時は高齢者歯科学講座）に所属して、渡辺 誠教授のご指導のもと学位を取得いたしました。大学院修了後も同分野に在籍し、有床義歯補綴学、高齢者歯科学、顎口腔機能学において、臨床、教育、研究面で研鑽を積み重ねていただきました。2007年には日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅰ講座に移り、祇園白信仁教授、飯沼利光教授のもとで、講座の発展に努めてまいりました。また、2015年からは附属歯科技工専門学校の教務主任と校長も併任し、歯科技工士学校入学志願者の全国的な減少のなか、同校の存続と発展に努めてまいりました。

日本補綴歯科学会では、これまでに専門医制度委員会の幹事のほか、社会連携委員会委員を、現在は特命委員会副委員長を務めております。これまでの学会への貢献は微々たるものですが、今後はさらに学会活動に参加させていただきたく存じます。

これまでに、地方の国立大学と都心の私立大学という、真逆に位置する大学に勤めてまいりました。両大学で培った経験を活かし、奥羽大学歯学部ならびに日本補綴歯科学会の益々の発展のために、一層精進する所存です。今後とも何卒倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。





猪子芳美

日本歯科大学
新潟病院総合診療科
2023年4月1日

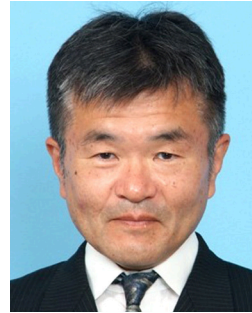
このたび、日本歯科大学新潟病院総合診療科の教授を拝命しました猪子芳美でございます。今回、本試面をお借り

して、日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶させていただき、感謝申し上げます。

私は、2004年日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第3講座（森田修己教授）助手として入局し、2009年日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第2講座（渡邊文彦教授）講師、2013年日本歯科大学新潟病院総合診療科講師、2017年より准教授として補綴学、特に有床義歯、クラウンブリッジの臨床・研究・教育に携わって参りました。また日本補綴歯科学会では広報委員会および医療問題検討委員会の委員として業務にあたり、学会を通して多くの会員の先生方と知り合うことができました。さらに多くの先生方からご指導をいただきました。

現在、主に診療に携わっている部署は睡眠歯科センターで、昨年度よりセンター長を拝命しております。今まで補綴学で学んできた知識や技能を基にして、睡眠時無呼吸の患者様の診療にあたっております。今後は、後輩の育成にも尽力いたす所存でございます。

浅学非才の身ではございますが、日本歯科大学新潟生命歯学部ならびに日本補綴歯科学会の益々の発展のために、一層精進いたします。今後とも何卒倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



岡本和彦

明海大学
歯学部機能保存回復学講座
有床義歯補綴学分野
2023年4月1日

2023年4月1日、明海大学歯学部機能保存回復学講座有床義歯補綴学分野の主任教授

に就任いたしました。この場をお借りして、公益社団法人日本補綴歯科学会の皆様にご挨拶申し上げます。

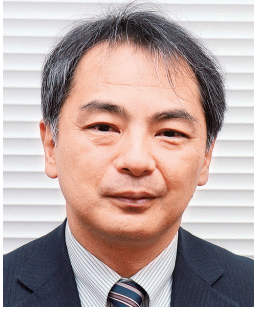
私は1990年3月に明海大学歯学部を卒業後、明海大学大学院歯学研究科（クラウン・ブリッジ補綴学）へ進学し、天野秀雄教授にご指導いただきました。大学院修了後、歯科補綴学第二講座（クラウン・ブリッジ補綴学）に所属し、当時の猪野照夫准教授のもとで有限要素法による支台築造歯の応力解析に取り組みました。その後、2007年にアラバマ大学バーミングハム校歯学部補綴学講座（Hsu教授）への1年間の海外研修の機会を得て、インプラントオーバーデンチャーのアタッチメントに関する基礎研究を行いました。帰国後は、大川周治教授（公益社団法人日本補綴歯科学会第38代理事長）の指導を受けながら、准教授として有床義歯補綴学とインプラント治療学を担当しました。

2019年4月に本学の保健医療学部が新設された際、教授として赴任し、2023年の配置換えにより、歯学部へと復帰いたしました。

学会活動では、第103回と第124回学術大会の主管校として携わるとともに、委員会委員および幹事を務めさせていただくことで学会運営について学び、多くの尊敬する先生方とお知り合いになる貴重な機会となりました。

浅学非才の身ではありますが、明海大学歯学部および公益社団法人日本補綴歯科学会の更なる発展に微力ながら貢献できるように努力いたします。今後とも皆様からのご指導ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。





近藤尚知

愛知学院大学
歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座
2023 年 4 月 1 日

このたび、愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座の主任教授を

拝命致しました、近藤尚知でございます。専門領域は、歯科補綴学、口腔インプラント学で、主に上記の臨床、研究、教育に従事してきました。愛知県の生まれで、東京医科歯科大学を卒業後、大学院（顎顔面補綴学専攻）へ進学し、大山喬史教授にご指導いただき、臨床だけでなく、骨代謝関連の研究にも従事することができました。学位取得後は、附属病院の顎口腔機能治療部（1997-1999）、米国ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院の研究員（1999-2001）、帰国後も東京医科歯科大学のインプラント・口腔再生医学分野の助教（2001-2009）として、本研究に従事してきました。同時に、インプラントの臨床にも従事し、2009 年からは岩手医科大学歯学部口腔インプラント学科の准教授として着任し、2012 年には講座再編もあり、補綴・インプラント学講座の主任教授に昇任しました。この講座は、補綴のすべての講座を統合し、さらにインプラントも包括した大講座で、当時は CAD/CAM と口腔内スキャナーを活用した、デジタルワークフローの確立に尽力してきました。また、重度インプラント周囲炎を完治させることにも成功し、もうひとつの新規治療法を確立しました。

そして、本年 4 月に愛知学院大学歯学部冠橋義歯・口腔インプラント学講座の教授として、約 35 年ぶりに地元に戻って参りました。今後は東海地区の歯科医療の発展に尽力しながら、新技術を全国・全世界に向けて発信して行く所存でありますので、補綴歯科学会の諸先生方におかれましては、引き続きご指導を賜わりたいお願い申し上げます。



田邊憲昌

岩手医科大学
歯学部補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野
2023 年 3 月 1 日

2023 年 3 月 1 日付けで岩手医科大学歯学部補綴・イン

プラント学講座補綴・インプラント学分野の特任教授を拝命いたしました田邊憲昌と申します。本紙面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、2002 年 3 月に岩手医科大学歯学部を卒業後、岩手医科大学大学院歯学研究科（歯科補綴学第二）に進学し、石橋寛二教授（現・名誉教授）、藤澤政紀先生、武部 純先生にご指導いただき、顎機能障害に関する研究で学位を取得いたしました。大学院修了後には歯科補綴学第二講座に所属し、助教を務めました。2012 年からは講座再編があり、冠橋義歯、有床義歯、口腔インプラントを包括した補綴・インプラント学講座となり、近藤尚知教授のご指導のもとで、新たに口腔インプラントやデジタル歯科、スポーツ歯学などの研鑽を積ませていただき、講師、准教授と努めさせていただきました。

日本補綴歯科学会では、委員会委員、本部・支部の代議員、支部幹事などの活動をさせていただいております。2019～2022 年度には医療問題検討委員会委員（山森徹雄委員長）を務めさせていただき、多くの経験を積ませていただきました。今後も、歴史ある日本補綴歯科学会の会員として、さらに学会活動に参加させていただきたく存じます。浅学非才の身ではございますが、岩手医科大学歯学部ならびに日本補綴歯科学会の益々の発展のために、一層精進いたします。今後とも諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。